

# 北海道 文教広報



北海道文教大学



北海道文教大学附属高等学校



北海道文教大学附属幼稚園



—北海道文教大学  
まちとつながる 人とつながる

—北海道文教大学附属高等学校  
絆とつながりを大切に!

—北海道文教大学附属幼稚園  
この1年も元気と笑顔があふれました!



# まちとつながる

日本経済新聞社「大学の地域貢献度調査」

北海道文教大学では2023年に「北海道文教大学地域創造研究センター」  
2024年には人間科学部に「地域未来学科」を設立し、実践的な

## 大学の役割と本学の活動

大学×地域の連携は意外に古く、今でいう公開講座や通信教育、図書館の開放などが戦前から行われていました。その後、各大学ともさまざまな取組を進め、1990年代頃から「大学の社会貢献活動」が注目を集めるようになりました。

そして、2006年。教育基本法が改正されて、第7条に「大学」の項目が新設。これにより、大学での成果を広く社会に提供することにより社会の発展に寄与する

といった文言が加えられました。

その後、国によるいくつかの施策が示されて、2020年度に「大学による地方創生人材教育プログラム構築事業（COC+R）」がスタート。本学も地元恵庭市を中心に、道内外の自治体や学校法人、医療機関、福祉施設、企業などと「包括連携協定」を結び、互いの知識・経験・スキルなどを生かしながら、大学の主役である学生の教育に力を入れています。



▲メディアを通じて情報発信  
地元FM局や新聞・テレビ・SNS  
動画配信サービス等のメディアを  
利用して、恵庭の魅力を発信中。  
(P6へ)

▶本学×自治体で  
料理ボランティア  
南幌町で毎年開催される「男の  
料理教室」に、健康栄養学科  
がボランティア参加。(P5へ)



▲留学生と地域の異文化交流  
出前授業や大学祭、クリスマス会などのイベントを通じて、留  
学生による地域交流を推進。(P6へ)



▲企業とコラボで食  
品開発とレシピ考案  
地元企業、道外企業との  
連携で商品化や販売促  
進を目的に弁当開発やレ  
シピ考案。(P8・14へ)



◀歌って踊って啓発活動  
食育アイドルプロジェクト「えにわっ  
娘」と「XALICE(イザリス)」  
がイベント会場や施設などで食育啓  
蒙活動を行っています。第9回食育  
活動表彰で農林水産大臣賞を受賞  
しました。

# 人とつながる

北海道文教大学が全国第8位にランク



を創設。「新たな知の拠点」として地域との連携を深め、大学機能を強化。課題解決能力を身につけた人材を育成しています。

## これまでの活動が認められました

2025年12月、本学に思いがけない知らせが届きました。日本経済新聞社が隔年で実施している「大学の地域貢献度調査」の学生数別ランキング（1,999人以下）で、全国第8位にランクされたのです。小規模私立大学の中では全国第2位。今回は全国497大学からの回答によるもので、地域連携プロジェクト、自治体・企業との協働、学生の地域活動などの取組が総合的に評価されました。

なかでも評価項目「組織・制度」では、21点満点中17.5点の高評価。地域課題の解決意欲が高い受験生を対象とする特待生制度「北海道活かす人選抜」なども評価されたようです。

本学は「地域に貢献する大学」として、次世代の担い手である学生と共に、地域課題にさらに取り組んでいきます。

### こんな点が評価されました！

#### 【組織力】全学をあげて、組織的に地域連携を推進

- 自治体との「包括連携協定」に基づいた組織的な活動
- 地域課題の解決に意欲がある受験生「北海道活かす人選抜」の採用

#### 【教育力】学生が「現場」で学ぶ実学教育

- 単位認定されるボランティア活動、地域課題の解決につながる実習が盛ん

#### 【開放力】地域住民に開かれた「知」の拠点

- 年間を通じた「公開講座」の実施回数と、参加者の満足度の高さ
- 大学の施設（図書館、体育館など）を地域住民に積極的に開放
- 教員による「出前講座」を近隣の小中高校で展開し、地域教育の底上げに寄与
- 150を超える包括連携協定を活用した数多くの共同プロジェクト

▶公開シンポジウム  
年に数回、主に本学の鶴岡記念講堂で国内外の研究者や多彩な分野で活躍中の著名人の講演会を開催。

北海道教育学会・北海道文教大学 共催企画  
公開シンポジウム  
人口減少社会における地域と大学  
— 釧路圏域の実践から考える —

日時 2026年 2.21  
13:00~17:00

参加費用 無料

会場 北海道文教大学822教室 (8号館2階)

◆報告1「地域の課題解決に向けた大学の挑戦 — 釧路公立大等地域経済研究センターの活動経験から —」  
北海道文教大学 地域創造研究センター長 小嶋 健二 氏

◆報告2「地域人材の循環形成に果たす高等教育機関の役割 — 釧路短大の経験から —」  
釧路短期大学長 杉本 龍紀 氏

◆特別報告「エッセンシャルワーカーの現場から」  
特別非常勤活動法人 金子 一也 氏

<開催趣旨>  
人口減少と高齢化が進行している。医療・福祉・保育・教育など地域生活を支えるエッセンシャルワーカーの不足が深刻化している。これらは地域社会の持続可能性を脅かす課題となっているが、専門人材の育成を担ってきた大学、短期大学の取り組みも転換点を見ている。本シンポジウムでは、  
・地域社会の持続可能性を脅かす課題の取り組み  
・地域人材の循環形成に向けた釧路短大の歩み  
・地域ケア現場から見たエッセンシャルワーカー不足の実態  
に焦点を当て、人口減少が進む現場において、地域に大学が貢献してエッセンシャルワーカーなどの「地域人材」育成の仕組みを構築する道筋を探る。

【お問い合わせ】  
宮崎 隆弘（北海道文教大学 人間科学部 地域未来学科）  
〒061-1449 北海道釧路市黄金中央丁19番地の1 E-mail: t-miyazaki@do-bunkyo.ac.jp

北海道文教大学 公開講座 HBU 保存券

今年7年度 受講者募集

2025年度 北海道文教大学公開講座 開講スケジュール

期	日時	題名	講師	定員	学費
1	10/18(日) 11:00~12:00	人生劇場にアフレコをアフレコしよう！ 「人生劇場」の魅力を再発見しよう！ 「人生劇場」の魅力も「人生劇場」の魅力も	山本 浩一 氏	100	1000
2	10/25(日) 10:00~11:00	「人生劇場」の魅力も「人生劇場」の魅力も 「人生劇場」の魅力も「人生劇場」の魅力も	山本 浩一 氏	100	1000
3	10/31(日) 10:00~11:00	「人生劇場」の魅力も「人生劇場」の魅力も 「人生劇場」の魅力も「人生劇場」の魅力も	山本 浩一 氏	100	1000
4	10/14(日) 14:00~15:30	健康増進と生活習慣病予防のための 「エッセンシャルワーカー」の役割	金子 一也 氏	300	1000
5	10/16(日) 13:00~14:30	「地域課題」の解決	山本 浩一 氏	300	1000

◀公開講座(P3-4へ)  
年間を通じて、地域の活性化や健康寿命などをテーマに開催。  
▶高田教授によるインソール作製講座



# 北海道文教大学の“知財”をキャンパスの外へ 公開講座で地域に貢献

## 病理学と作業療法 — 科学的根拠に基づく実践の系譜

### 機能障害を真に理解するために

病理学は、病気の原因や病態、組織の変化を明らかにし、医学の科学的根拠（エビデンス）を支える学問である。作業療法においても、対象者が抱える機能障害の背景にある「理（ことわり）」を理解するために、病理学の知識は不可欠な土台となる。

例えば「手が動かない」という訴えがあった場合、原因は一樣ではない。脳梗塞で脳が傷ついているのか、関節リウマチで関節が壊れたり炎症を起こしたりしているのかによって、支援の方法は大きく変わる。前者なら神経の回復を助ける訓練を中心にを行い、後者なら関節に負担をかけない動かし方や自助具の工夫、生活上の注意点を提案する。つまり作業療法は、「何が起きているか」を理解したうえで、より適切な方法を選ぶ専門職なのである。

### より質の高い作業療法をめざして

歴史的にも病理学と作業療法の結びつきは深い。作業療法の創始者の一人であるアドルフ・マイヤーは、スイスで正統的な病理学を学び、アメリカへ渡った後、病理医として働いた経験を持っていた。その後、精神医学へ進み、「アメリカ精神医学の長老」とも呼ばれる影響力のある存在となる。

マイヤーは、心の病気を脳だけの問題としてではなく、生活環境や習慣、ストレスとの関係から理解する「精神生物学」を提唱し、人は日々の行為や生活の積み



医療保健科学部リハビリテーション学科 作業療法学専攻  
教授 瀧山 晃弘 (TAKIYAMA Akihiro)

北海道大学大学院医学研究科脳科学専攻博士課程修了、博士(医学)、日本専門医機構病理専門医、日本医師会認定産業医。ピアニストとしても活動し、国内外のコンクールで数々の賞を受賞。

重ねによって心身が形づくられる「作業的存在」であることを明らかにした。このような彼の独創的な思想の根底には、病理学で培われた客観的・科学的な観察眼が息づいている。

現在の作業療法が、根拠を大切にしながら発展してきた背景には、このような学問の積み重ねがある。病理学を学ぶことは、体の中で起きていることを理解し、よりよい支援につなげるための大切な力なのである。



幅広い分野のスペシャリストが教壇に立つ北海道文教大学。  
本学では公開講座を通じて、人びとに役立つ知的情報を発信しています。  
今回は医療保健科学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の  
瀧山晃弘教授と玉 珍准教授に誌上公開講座をお願いしました。

## 生き生き! 作業療法のちから

### 手・腕・肩の機能を追求

私は日本で作業療法士の国家資格を取得し、臨床現場で実践を重ねながら大学院へ進学し、博士課程を修了しました。大学院のときから上肢機能、つまり肩から指先までの機能と日常生活活動との関係、その背景にある脳活動の特徴ならびに加齢の影響について研究しています。

上肢機能は疾患による障害だけでなく、加齢によっても変化し、生活の質や社会参加に大きく関わる重要な要素であると考えています。また、作業療法士として長年にわたり多くの高齢患者の支援に携わるなかで、意思表示が困難な方への関わりを数多く経験してきました。その際、常に問い続けてきたのは、「本人は何を望んでいるのか」「どのように生きていきたいのか」「どうすれば最期までその人らしさを支えられるか」という点です。

そのために家族からの情報収集を重視してきましたが、身近な家族であっても本人の価値観や希望が十分に共有されていない場合があることも実感しました。

### 誰もが自分らしく生きるために

こうした臨床経験を背景として、地域の高齢者および家族を対象に、自分らしくいきいきと生きるためのリハビリテーションの意義を伝える公開講座や啓発活動にも取り組んでいます。

加齢や疾病によって身体機能や社会的役割が変化し

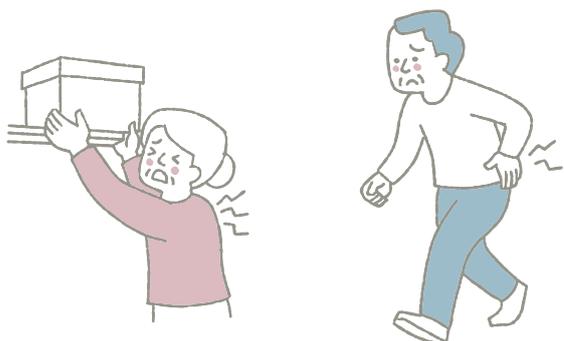


医療保健科学部リハビリテーション学科 作業療法学専攻  
准教授 玉 珍 (GYOKU Chin)

札幌医科大学大学院保健医療研究科理学療法・作業療法学専攻博士課程修了。博士(作業療法学)。身体機能作業療法、高齢期作業療法を専門とし、地域で暮らす高齢者を対象とする健康講座なども開催。日本作業療法学協会、日本認知症学会、日本生体磁気学会等に所属。

でも、日々の活動や趣味、人とのつながりを維持することが、心身機能の保持と生活の質の向上につながります。特別な訓練だけでなく、楽しさや役割意識を伴う日常的な活動の継続こそが、健康寿命の延伸に寄与すると考えています。

研究と臨床、そして地域への発信を通して、科学的根拠に基づいた作業療法の価値を広く伝え、一人ひとりが自分らしく生活できる社会の実現に貢献していきたいと考えています。



▲後期高齢作業療法が専門の玉先生は11月12日(水)の公開講座を担当しました。

# 地域のみなさんとの

教育や食、福祉、医療、国際分野での高い専門知識とスキルを持つ人材育  
本学では、学生たちが日ごろの学びを社会還元しようと、あっちで、こっち

## 南幌町でシニア世代の健康づくり



▲みなさん、手慣れているようですね! 写真右が佐藤さん。

2021年に本学と包括連携協定を締結した南幌町。今年度も南幌町で毎年開催されている「男の料理教室」に健康栄養学科の学生4名が参加。当日の様子を4年生の佐藤桃花さんに聞きました。

### 特産品を生かした料理で交流

私たちが手伝ったのは献立作成、調理補助、栄養講話の3点。参加者のなかには去年もいらした方がいて、会話も弾み親しく交流させていただきました。

大根ときゅうりは細切りで  
お願ひしま〜す



▲健康栄養学科の男子学生も活躍(写真左)。



▲南幌町のお母さんたちがボランティアで参加。



▲事前打ち合わせも入念に。

南幌町はキャベツや長ネギ、トウモロコシなどが特産品です。献立作成では「地元の野菜を使おう!」ということになりました。そのうえで、高齢の方は一般的にタンパク質不足になりがちなので、冷凍のサバフィレーレを使ってみました。サバは、高タンパクで低脂質。脳の機能低下を防ぐといわれているオメガ3脂肪酸のDHAやEPAも豊富ですから。

南幌町のキャベツは甘くてシャキシャキとした食感があり、とても美味しかったので、また料理に使いたいです。

### 「男の料理教室」が就職につながった

この教室は、南幌町で行政栄養士として活躍している卒業生の提案で開催されるようになり、私たちが在学生が参加しています。病院や企業の管理栄養士だと、関わる方は限られますが、行政栄養士は、その町に住む全ての世代の人が対象です。3年生のときにこの教室に参加して、私も地域に密着できる行政栄養士になりたいと思うようになり、道東地方のある自治体に就職が決まりました。

この4年間、民間企業と連携してレシピ開発や商品開発なども経験しました。どれも貴重な体験で、これからの仕事に役立てたいと思っています。

#### 献立

- ・ごはん(なんぼろピュアライスなまつぼし)
- ・サバの回鍋魚(ホイコーヴォ)
- ・具だくさん中華スープ
- ・春雨サラダ



▲献立は学生が考案。

# 交流で、実学教育!

成に力を注いできた北海道文教大学。  
で、多彩に活動中です!

## 国際学部がラジオ番組制作に挑戦

1920年に米国で誕生したラジオ放送。  
日本でも1925年に東京から第一声が発せられ、現在ではコミュニティーFMが全国に普及。恵庭でも「e-niwa 77.8MHz」が街の声を届けています。

本学は、その運営母体である株式会社あいコミと9月に包括連携協定を締結。11月30日に開催された「FMe-niwa 77.8MHz開局15周年感謝祭」に、後期科目「地域連携プロジェクト」の一環で、国際学部（国際教養学科・国際コミュニケーション学科）の3年生も参加。学生37名が8チームに分かれ、「誰か一人のために、思いを込めて届ける番組」をテーマに、5~7分間のショート番組を企画立案から構成、原稿づくり、収録まで手掛けました。収録番組は、年明け1月から電波に乗って全国へ。制作に初めて参加した国際コミュニケーション学科3年で野球部員の折霜浩徳さんの声を誌面でお届けします!



### リスナーを意識して制作 by 折霜浩徳

どうすればリスナーの方々聞いてくれるかが大きな課題で、あえて敬語を控え、普段の言葉で話しました。

内容は昨年、短期留学でスリランカを訪れたときのことが中心です。SNSで文字を使ったコミュニケーションが定着しているなかで、ラジオを通じて大勢の人に語りかける面白さを体験できました。将来は高校野球の指導者になりたいと、英語教員の資格取得を目指していますが、ラジオ番組の制作に関われる機会があったら、また挑戦したいです。



## 留学生 恵庭市立恵庭小学校で出前授業

2月10日（火）、国際学部の留学生6名（中国、スリランカ）が恵庭市立恵庭小学校を訪問。「総合的な学習の時間」の国際交流授業で講師を務めました。留学生たちを迎えたのは小学3年生の児童たち。小学校教育や食文化など異文化の話に興味いっぱい表情で聞いていました。こうした小さな異文化交流の積み重ねが、こどもたちの夢を育み、平和な世界へとつながりますように!



◀中国留学生の許澤軒（きよたけ）さんは、中国料理の魅力や多民族国家中国の特徴などを自ら作成した資料で説明。



◀スリランカの留学生ティノさんら4名は、5歳で小学校に入学し5年生で卒業するスリランカの学校制度を紹介。

特集

北海道文教大学

こども発達学科×附属高校×附属幼稚園

# 鶴岡学園内連携で絵本の読み聞かせ

12月、人間科学部こども発達学科の学生が、附属高校の2年生と3年生を対象に、「絵本の読み聞かせ」講習を行いました。附属高校では保育士や幼稚園教諭を目指す普通科ヒューマンプログラムの一環で、附属幼稚園の園児たちと交流する「**かるがも実習**」に行きます。学生から読み聞かせのコツを教わる生徒たちは真剣そのもの。大学・附属高校・附属幼稚園がつながり「**学びが循環**」するのは、本学園ならではの取り組みです。学園内連携を体験したこども発達学科4年生の前田優奈さんに様子を聞いてみました。



## “教わる”から“教える”へ

100分間のレクチャーでは、場面に合わせたページのめくり方とか抑揚をつけた読み方とか、読み聞かせのコツや心構えなど、私たちが大学の実習で学んだことを伝えました。

初めての経験なので不安はありましたが、年齢が近い分だけ高校生の目線に合わせてやすい。絵本は自分も楽しんで読むことが大切で、その点を強調しました。私たちは「**かるがも実習**」には参加していませんが、こどもたちも喜んでくれて大成功だったそうです。

4月から保育所で働きますが、絵本の魅力をこどもたちに伝えられる保育士になりたいと思い、面白いと思った絵本をノートにまとめています。「**絵本専門士**」という資格をいずれ取るつもりです。

私の推し絵本は『**ぜったいに おしちゃダメ?**』というアメリカの絵本作家の作品です。日本では2017年の発刊から100万部以上も売れています。きっと、大人も楽しめるはず。ぜひ、読んでみてください！



▲学生による附属高校でのレクチャーの様子。写真左が前田さん。



▲附属高校の生徒による附属幼稚園での「**かるがも実習**」の様子。



## ミラノ・コルティナ2026冬季オリンピック出場!!

# 女子アイスホッケー スマイルジャパン 伊藤麻琴選手の健闘に拍手!

悔しさを  
力にかけて、  
ファイト!



▲オリンピック3大会連続出場した健康栄養学科の米山知奈講師。今回は、苫小牧市のパブリックビューイングで解説を務めました。

2月に開催されたミラノ・コルティナ2026冬季オリンピックに、人間科学部こども発達学科3年生の伊藤麻琴選手、本学卒業生の志賀紅音選手と前田涼風選手の3名が「スマイルジャパン」のメンバーとして出場。結果は、1勝3敗で予選B組4位でした。帰国した伊藤選手から感謝の気持ちが寄せられました。

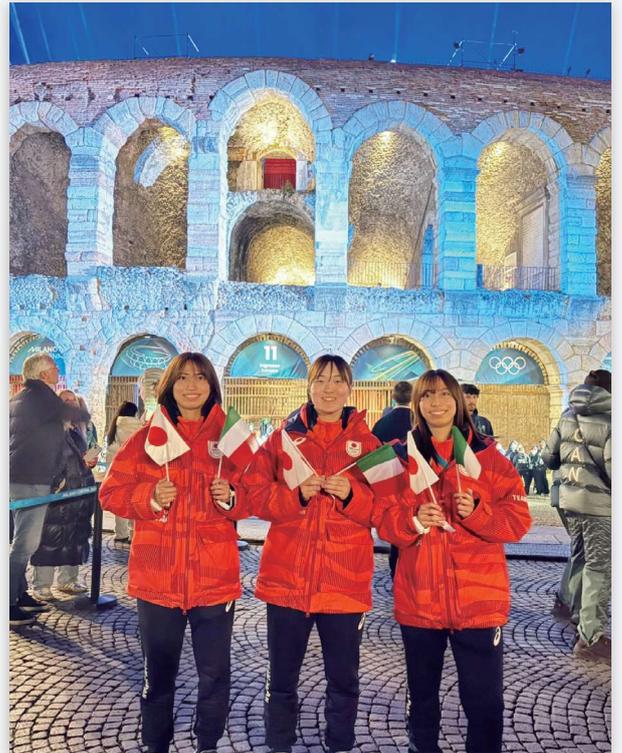
## 多くの声援に支えられました!

帰国して真っ先に、母から「おつかれさま」という言葉で迎えられました。帰国する前には、少しでも早く日本に戻ってゆっくりしたい、温泉に行きたいという心境だったので、ホッとしました。

今回の試合では、第一戦のフランス戦で決勝点を決めたときには心が震えるほどうれしかったけれども、予選リーグの敗退が決まったときは本当に悔しくて、もっと強くなりたいと心底思いました。そのためにも、技術的、体力的にもっと力をつけなければいけないと思ったのと、今後は海外挑戦に向けての語学勉強にも力を入れようと決めました。

印象に残っているのは会場の熱気です。全試合とも客席はほぼ満員。オリンピックはやっぱり特別です。それと日本オリンピック委員会（JOC）が設置し、味の素社が運営してくださった「JOC G-Road Station」という栄養サポート拠点が選手村の近くにあり、美味しい和食をいただけただことも有難かったです。

今回は、数えきれないほど多くの方々に支えられました。たくさんの応援ありがとうございました!



▲伊藤麻琴選手(写真中央)と野呂里桜選手(写真左)、野呂莉里選手(写真右)。

## おから入り大豆飲料で食卓からSDGs 「食品開発Lab.」の本ができました!

食べることが好き、食と健康の知識を深めたい。そんな学生たちが集まる健康栄養学科の「食品開発Lab.」。山森栄美教授が主宰するこのラボに参加する学生たちは、2023年から株式会社ふくれん（福岡県）が開発した「まるごと大豆飲料 大豆スムージー」を使ったレシピを考案し、同社の公式サイトで紹介されています。

そして今年1月には待望のレシピ本、『“おから”からSDGsを考える～日本の“北と南”が繋がった次世代SDGsレシピ～』（中西出版）が出版されました。

全25品のレシピを考案したのは6名の学生と山森教授。レシピとともに、6名の「食への思い」が語られ、興味津々に読み進められるユニークなレシピ集です。料理も美味しそう。それぞれのエプロン姿もステキ。読んで、作って、食べて、気分もすっきり! 通販サイトで販売中です。

### “おから”から SDGsを考える

～日本の“北と南”が繋がった次世代SDGsレシピ～



株式会社ふくれん × 北海道文教大学  
美味しく食べて健康に!  
“食”に学んだ生き方、考え方

山森 栄美 編著 渡部 俊弘 監修



▲山森栄美(編著)/渡部俊弘(監修)/税込1,760円

# “文教Lab”

## 多様性の時代に

人間科学部こども発達学科では、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭・特別支援学校教諭の養成を通して、こどもと向き合う専門性を育てています。こどもの育ちを支える分野では、「多様な背景や特性、在り方を包摂する視点」がとても大切です。今回は二人の研究者の活動をご紹介します。

## 心に寄り添うこと、身体に寄り添うこと

### マイノリティな私のこと

私は小学校教諭として働いた後、20代後半から心理学を学びました。博士課程在籍中に二人のこどもを出産し、こどもをおんぶしながら博士論文を書きました。背中に感じた我が子の温かさと重みは、研究者としての私の原点です。私が博士の学位を取得して、長い二度目の学生時代を終えたのは40代前半でした。

博士課程修了後も研究を続けたいという思いは尽きませんでした。大学教育を通して自分が受け取ってきた多くの恩恵を次の世代へと手渡したいという思いから、現職を選びました。現在は、学生たちが自分の興味・関心を見つけ出し、自分なりの考えや答えにたどり着いていく、その自信に満ちた笑顔に立ち会える瞬間を、何よりも嬉しく感じています。

一般的な学齢期を過ぎてからも学び続けた私の経歴は、マイノリティ（少数派）かもしれません。けれども、進学や就職、仕事や子育てなど、人生のさまざまな岐路で、選択に迷いながら現在にたどり着いたという点では、多くの方と共通する部分もあるのではないのでしょうか。こうした私の歩み方を紹介すると、学生たちはしばしば勇気づけられた表情で耳を傾けてくれます。

私は、いつスタートを切ってもよいと思っています。人生のどの時点からでも、情熱のある方向へ道を拓いていくことはできると思います。学び直しでも、仕事でも、子育てでも、自分の興味・関心を大切にする一歩から始めてよいのです。そのことをこれからも伝えていきたいです。

### 身体が感じている世界

私の博士論文の研究テーマは自閉スペクトラム症に関するものです。自閉スペクトラム症は、社会的な関わりや感覚の受け取り方に特徴がある、いわゆる発達障がいの一つです。発達障がいは「有り」「無し」と二



人間科学部こども発達学科  
教授 **木谷 岐子**  
(きや みちこ)

小学校教諭を経て、20代後半から心理学を学び、臨床心理士資格を取得。心理士として働きながら、北海道大学大学院教育学院博士後期課程に進学。子育てをしながら博士(教育学)の学位を取得。2020年より現職。

分されるものではなく、個性や特性のグラデーション(濃淡)として捉えられています。

例えば、「感覚の過敏さ」がある方の場合、外部からの刺激を大きく、強く、そして多く受け取ることとなります。その結果、周囲からの視覚的・聴覚的・触覚的な刺激を「脅威」として捉えやすくなることがあります。

同じ出来事であっても、身体の反応は人によって異なります。「自分とは異なる反応」に対して、つい「大げさだ」と感じてしまうことがあるかもしれません。しかし、出来事の大きさやインパクトを判断しているのは、その人の身体です。「その人の身体の反応と判断を尊重すること」が、「心に寄り添うこと」の本質にあると私は考えています。

### 揺さぶられながら、 関係は生まれる

特別支援学校で教育実習を行う学生たちもまた、「自分とは異なる背景や特性を持つ人」との出会いに大きく揺さぶられます。そのプロセスについての研究を紹介します。

実習当初、学生は戸惑い、特別支援学校のこどもたちに対して、自分のこれまでの人との関わり方が通用しないことにショックを受けます。しかしそこから、「どう

# 生きる

すれば関わらせてもらえるのだろう」とこどもたちに向き合い、現場の知恵を受け取りながら再出発します。

やがて学生は、その子の感じ取る世界や理解のペースに自分も一緒にひたるようにして関係をつくろうとする態度へと変容していきます。そして、障がいがあるこどもたちに対し、「あなたとわたしが関わり合うこと」への喜びを感じ得て実習を終えます。このプロセスが進行する間、学生は、相方の実習生と支え合うことで、こどもたちとのかかわりへのエネルギーをチャージするというプロセスが見られました（木谷 2025）。

こうした学生たちの変容は、「多様性の包摂」という人の営みが、「揺さぶられながら進む過程」であることを教えてくれます。この様な営みは、特別支援教育の場に限らず、私たちがさまざまな場面で日常的に経験していることだと思います。

## 特別な専門性ではなく、日常の中で

「多様性の時代に生きるとは、どのような生き方なのか」ということについて考えてきました。振り返ってみると、多様性とは、あらかじめ理解できるものでも、簡単に受け入れられるものでもなく、出会いのたびに揺さぶられ、考えや自分の価値観を再構築していくプロセスなのだと感じています。心に寄り添うこと、身

体に寄り添うこととは、相手の反応を自分の物差しで判断するのではなく、その人が生きている世界や、その人の身体が感じ取っている現実に、目を向けることだと思います。それは、特別な専門性がなくても、日常の中で、自身が直面する戸惑いや憤り、葛藤をむしろ大切にして、向き合うことができれば、誰もが試みることのできる営みだと私は考えています。これは学生にも授業の中で、伝え続けていることです。

私は現在、新たな研究テーマの一つとして、アイヌ民族の歴史と現在に向き合っています。北海道で生きていく私たちが、この土地で起きたことの記憶を共有し、その痛みに向き合い、悼むことから目をそらしてはならないと感じているからです。多様性を語る際に民族的マイノリティを含めていくことの重要性を、今後発信していきたいと考えています

これからも私は、研究と教育と心理臨床の「あわい」を行き来しながら、人が他者と出会い、戸惑い、関係を編み直していく過程を大切に見ていきたいと思っています。本稿が、読者の皆さんにとって、自分とは異なる誰かと出会ったときの関わり方を、立ち止まって考えるきっかけとなれば幸いです。

本文中参考文献：木谷岐子，2025，「学生はいかにして障がいがある児童生徒とのかかわり方を見つけていくのか——特別支援学校での教育実習体験に着目して」『質的心理学研究』24:166-185.

## こどもの生活世界に寄り添う

昨年まで小学校の教員を務めていた私にとって、今回の木谷先生のお話は深く共感できる内容でした。

私自身、外国籍の子や発達障がいの子など、多様なこどもたちと出会うなかで、指導をしても変わらない姿に戸惑うこともありました。しかし、こどもの生活世界に寄り添って考えたときに、「この子が生活する教室はなんて過酷なんだろう」と思えることがたくさん見えてきたのです。その子にとって、「自分の思いが伝わらない」「自分のことを認めてくれない」そんな場面があったのです。そのような経験が契機となり、一人ひとりの苦しさを受け止めようとしたとき、こどもたちと私の間で、少しずつ信頼関係が生まれてきました。木谷先生の記事にあるとおり、「多様性の包摂」には、はじめは異質な他者に対する葛藤があります。その違いを認めることからしか信頼関係は生まれないことを今回、木谷先生に改めて教えてもらいました。



人間科学部こども発達学科  
准教授 **佐々木 英明**（ささき ひであき）  
長年、札幌市内の小学校で教壇に立ち、2025年4月より現職。令和6年 札幌市人間尊重の教育フォーラム発表では「アイヌ民族に関する教育と職員の同僚性」をテーマに講演。

# 絆とつながりを大切に!

雨にも負けず、猛暑・大雪にも負けず、花と緑あふれる恵庭で過ごした1年間。

どんな出来事にも正面から向き合った“自分”。がんばったネ! 青春の1ページを飾るシーンを振り返ってみました。



## 高校生活最大のイベント 修学旅行

広島平和記念資料館では、  
原爆の悲惨さや平和の  
大切さを改めて感じました。  
自分の中で初めて戦争が  
現実味を帯びた気がしました。

10月21日(火)から24日(金)ま  
での3泊4日の日程で、広島・京  
都・大阪・奈良をめぐる修学旅  
行が行われ、2年生は貴重な体験  
とたくさんの思い出をつくるこ  
とができました。



京都では歴史のある  
名所を巡り、  
日本の伝統や文化の  
美しさを体感できました!

宮島の厳島神社では、  
干潮の時間帯で  
鳥居まで行けたのが  
とても良かったです!



## 白熱! BUNKYO大運動会



9月25日(木)・26日(金)の2  
日間、恵庭市総合体育館で  
BUNKYO大運動会を開催。今  
年度も全校生徒を紅組と白組  
に分け、学年の垣根を超えて  
の行事です。みんな真剣に、そ  
して楽しく競技に参加して大  
いに盛り上がりました。



## 地域交流ランチ会

地域交流事業の一環でランチ会を開催。当日は原田  
裕恵庭市長をはじめ、市内の中学校校長など約20名を  
招き、食物科の3年  
生が和洋折衷の料  
理をコースでふるま  
いました。食材は学  
校菜園のミニトマト  
やほうずき、恵庭産  
のカボチャなど。生  
徒たちには貴重な  
経験となりました。





# 食物科で磨くクリエイティブな世界 料理人&パティシエを目指しています!

高校卒業と同時に調理師免許が取得できる食物科。日ごろの学習成果の腕を試すために、毎年2つのコンテストを開催しています。出品作の中から優秀作品を紹介しましょう。

## 飾り切り作品展

野菜やかまぼこなどの食材をさまざまな形に細工し、料理を華やかに見せる「飾り切り」。センスと手先の器用さが求められる調理技法です。食物科では2年生と3年生を対象に、毎年9月に作品展示を行い、受賞作品を発表しています。



飾り切り作品展2年最優秀賞  
2年5組 村木和咲(むらき あいさ)



飾り切り作品展3年最優秀賞  
3年5組 豊田悠斗(とよた ゆうと)

## 卒業料理展

12月12日(金)、「卒業料理展」を開催しました。3年生にとっては3年間の集大成を発表する場で、どの作品も甲乙つけがたいものでした。卒業後もさらに腕を磨き、多くの人びとを笑顔にする料理を作ってほしいと教職員一同願っています。



西洋料理部門1位  
豊田 悠斗(とよた ゆうと)



日本料理部門1位  
佐久間 朱甫(さくま しゅほ)



中国料理部門1位  
加藤 渚奈(かとう なな)

## 北海道文教大学附属高校の活動を地域へ

### PTA講習会で包丁の研ぎ方を伝授

今年度のPTA講習会は、株式会社庖丁のきむらの木村知紀氏を講師に迎え、包丁研ぎ講習を行いました。料理の味は包丁の切れ味次第。皆さん熱心に講習を受け、有意義な時間になったようです。



### 保護者食事会

食物科3年生の保護者を招待し、3年間の学びの成果を披露しました。出来上がった料理は生徒たちがちょっぴり緊張しながらテーブルへ。保護者のみなさんは、真心のこもった料理を感慨深い思いで味わったのではないのでしょうか。



# この1年も元気と笑顔があふれました!



2025年度の当園は、教育・保育を見直した1年でした。テーマは「生きる力の基礎を育む」。研修と検証を重ねたことで、日常の些細なことから恒例行事まで、さまざまな変化が見られました。

「安全で安心な環境での保育を心掛ける」で始まった0歳児。こどもたちは、年齢を重ねるごとに大人に見守られる安心感を得て、「やってみたい!」を見つけ出しました。そして友達と一緒に取り組み、時には意見の食い違いや葛藤を通しながらも互いを認め合うまでに成長。小さな子への優しいまなざしと関わりをとおして、今年度のテーマに沿った育ちを自ら培い、次に最年長を迎える子らは、小学校へ巣立っていく年長児「つるのこ組」を見送りました。

この教育・保育を支える環境は、大学と高校を有する鶴岡学園全体の連携により生み出されています。その一つが、北海道文教大学附属高校の2年生と3年生による「かるがも実習」の受け入れです。「あれ? 前も来ていたおにいさん、おねえさんだね」と見覚えのある生徒たちが今年度も訪れ、こどもたちや保育士たちと親しく交流する場面がありました。

大学からは、ボランティアグループ「たまごクラブ」の学生が普段から遊びに来てくれます。さらに、保育実習、教育実習、調理実習、小児看護実習の学生も来ます。そして今回初めて、当園の食育に彩を添える形で、学生による食育アイドルグループ「えにわっ娘。」が来てくれました。園児たちにとっては、たくさんの人びとに出会い、新たな発見の機会となりました。

また、運動会は収容人数が多い北海道文教大学スポーツアリーナで行い、多くの保護者や親せきの方々も迎えることができました。

当園が進める子育て支援事業「みんなおいでよ」は、内容の見直しが功を奏して、地域の子育て家庭の皆さんも来園してくださいました。大学祭の「恵華祭」に当園が出店した際には、運動会でつながった人の輪がさらなる輪を広げ、多くの方々に参加していただきました。

こうして2025年の当園を振り返ると、新たな挑戦と多くの人たちとのつながりを深めた1年でした。さまざまな挑戦により、こどもたちの笑顔の回数も増えたように思います。これからも、こどもはもちろん、誰もが安心して集える附属幼稚園を目指していきます。

園長 小田進一



**めばえ組(0歳児)**  
野菜を見たり、触れたりしました。「これは何だろう?」と興味津々の子どもたちでした。



**ふたば組(1歳児)**  
楽しみにしていた雪遊び。やっと、まとまった雪が降って大喜び! お友達と一緒にふかふかのお山登りに挑戦していましたよ。



**つぼみ組(2歳児)**  
色が混ざった時の色の変化に気付いて笑顔いっぱいでした。



**たんぼ組(3~5歳児)**  
お正月に書き初めにチャレンジしました。毛筆で書くむずかしさを感じながらも集中して今年の干支「うま」をなぞっていました。



**あさがお組(3~5歳児)**  
給食で食べたみかんの皮を干して「みかんの足湯」をしました。「あったか〜い」「みかんのにおいがする」など、子ども達は友達と会話しながら嬉しそうでした。



**ちゅうりっぷ組(3~5歳児)**  
冬休み明け、福笑いで大笑いしました。

# 2025年9月～2026年2月 新着 包括連携協定



本学園では自治体・企業・団体・医療機関などと地域包括連携協定を締結しています。協定先と連携しながら、地域と一体になった学びの推進をさらに発展させていきます。

- 1 9月11日 医療現場とともに地域を支える人材育成  
**医療法人社団 鎮誠会**
- 2 9月24日 防災・減災で地域の安全を守る  
**アース製薬株式会社**
- 3 9月25日 エシカル消費とジェンダー平等の実現を  
**株式会社GIVER**
- 4 9月26日 地域FMの情報発信力で活性化  
**株式会社あいコミ**
- 5 10月24日 資源循環・再エネ活用で環境貢献  
**株式会社オークネット**
- 6 10月31日 人とAIがともに学び支え合う社会へ  
**株式会社日本コミュニケーションアカデミー**
- 7 11月13日 脱炭素の推進、持続可能な地域へ  
**環境省北海道地方環境事務所**
- 8 2026年1月30日 未利用水産物を地域活性化に  
**ふかうら地方創生協議会**
- 9 2026年2月24日 地域力を伸ばす・活かす  
**クラーク記念国際高等学校 × 日本地域創生学会**



## 包括連携協定トピックス

### 北海道味の素×ラルズ×北海道文教大学 第5回“食と健康”レシピコンテスト



レシピは健康栄養学科 Instagramで!

北海道味の素株式会社と株式会社ラルズとの連携で、2021年より開催されている「食と健康」レシピコンテスト。第5回目の表彰式が11月に行われました。このコンテストでは、味の素の「ラブベジ®」「スマ塩®」のコンセプトに基づいた和食・洋食・中華のレシピを健康栄養学科の学生が考案。優秀賞に選ばれた6作品のレシピが、ラルズのチラシで2月中旬まで順次紹介されました。



▲前列左から2人目が遠藤さん。

### だしのおいしさ感じる!きのこあんの豆腐ハンバーグ 「スマ塩®」部門 優秀賞 健康栄養学科 2年 遠藤風花さん

私は餡をトッピングした豆腐ハンバーグを考案しました。餡の味付けは『お塩控えめの・ほんだし®』を使用し、さまざまな料理にトッピングできるように、あえてシンプルな調味料で味付けをしています。餡はだしのうま味がしっかり感じられ、「豆腐ハンバーグと味のバランスが良い」と審査員の方から評価を受けました。手間をかけず、塩分を気にせず最後の一口まで美味しく食べられる自信作です。ぜひ、多くの方に作っていただきたいです。



## 恵庭市 「ふるさと納税」寄附金

2025年11月、恵庭市より本学にとって大変喜ばしいお知らせがありました。ふるさと納税の一部を恵庭市内の大学・専門学校（4校）に寄附するというもので、2014年に包括連携協定を結んだ本学もその対象となりました。本学では、教育環境の充実や学生支援などに役立てる予定です。



# OPEN CAMPUS

## 北海道文教大学の 言葉だけじゃわからない、 実学教育を体験してみよう!



### 次回開催情報

開催日時: 2026年3月28日(土)

※次年度開催日時については、受験生サイトをご確認ください。

内容: オープニング/体験プログラム/  
個別相談会・ミニ体験コーナーなど

#### タイムスケジュール

- 9:30 受付開始
- 10:00 オープニング(大学概要・入試説明など)
- 10:30 学科プログラム
- 12:00 ミニ体験コーナー、個別相談コーナー、キャンパス見学など

#### 【特典情報!】

- Amazonギフトカードプレゼント  
オープンキャンパスに参加+アンケートに回答が条件!
- 道外参加者得点  
道外からの参加者には、交通費補助制度を利用できます。
- HBUグッズプレゼント  
参加者全員にプレゼントいたします。

オープン  
キャンパスの  
お申し込み  
はこちら



受験生  
サイト



## 2026年度 北海道文教大学 オンライン個別相談会も開催中

遠方にお住まいでなかなかオープンキャンパスに参加できない方や、学科教員と個別にお話ししたい方を対象として、オンラインでの相談会を実施しています。日程や時間は、個別に調整いたしますので、お気軽にお申し込みください。



お申し込みはこちら

活かす人へ

## 北海道文教大学

〒061-1449 北海道恵庭市黄金中央5丁目196番地の1  
TEL: 0123-34-0160 FAX: 0123-34-1640

- 人間科学部: 健康栄養学科/こども発達学科/地域未来学科
- 国際学部: 国際教養学科/国際コミュニケーション学科
- 医療保健科学部: 看護学科/リハビリテーション学科  
(理学療法学専攻・作業療法学専攻)

オープンキャンパス、  
入試のお問い合わせはコチラ▶▶▶ **0120-240-552**

入試広報課 入試専用 ☎ 入試はここに

入試広報課では、資料請求をはじめ様々な相談にお答えします。お気軽にご連絡ください。

### ACCESS —アクセス—



#### ■JR利用の場合

- JR恵庭駅から  
JR恵庭駅「東口」から直進徒歩8分で  
北海道文教大学正門に到着
- 札幌駅から  
「JR千歳線」乗車。3駅目の「恵庭駅」下車後、  
東口より直進徒歩8分で  
北海道文教大学正門に到着  
JR恵庭駅まで快速「エアポート」で24分  
(快速エアポートは約12分おきに運行しています)
- 新札幌駅から  
「JR千歳線」乗車。2駅目の「恵庭駅」下車後、  
東口より直進徒歩8分で  
北海道文教大学正門に到着  
JR恵庭駅まで快速「エアポート」で15分  
(快速エアポートは約12分おきに運行しています)

#### ■自家用車で来学される場合

- 高速道路「恵庭IC」下車。高速道路出口を左折、恵庭川沿道路  
(道道117号線)を直進8分で北海道文教大学到着  
(駐車場は左に記載のとおり)